

枝幸高等学校郷土研究部採集土器にみる 鈴谷式・十和田式融合の一資料

山谷 文人

利尻富士町教育委員会

要旨 オホーツクミュージアムえさしに所蔵されている枝幸高等学校郷土研究部により採集された土器のうち突瘤文土器 18 点を抽出し紹介した。採集地点は、斜内山道とされ、昭和 30～40 年代に採集されたと推定されている。そのなかで、鈴谷式に特徴的な縄線文と十和田式に特徴的な突瘤文を合わせ持つ融合的な土器が 1 点見出された。双方の特徴を合わせ持つ土器は、さまざまなパターンがある中、本資料はこれまで例を見ないものである。こうした融合土器などを足がかりに、鈴谷式から十和田式への展開、ひいては続縄文文化からオホーツク文化にかけての画期について、検証し位置づけていくことが課題ととらえられた。

キーワード：続縄文文化、オホーツク文化、鈴谷式土器、十和田式土器、融合

はじめに

本稿では、かつて枝幸高等学校郷土研究部によって採集された遺物について、現在オホーツクミュージアムえさしに保管されている土器のうち突瘤文土器を紹介する。これら資料の採集地点は、斜内山道（現在の神威岬の海岸側迂回路）とされ、土器内面に記号（アルファベットと数字）がペン書きされている。何を意味するかは現状では不明だが、出土位置などではなさそうである。採集年代は、昭和 30～40 年代と推定されている。なお、斜内山道に程近い目梨泊遺跡では、同様な土器は確認されていない。

1. 土器の観察（図 2）

ここでは、全体資料より予め抽出された続縄文土器のうち、突瘤文土器と呼称される資料 18 点

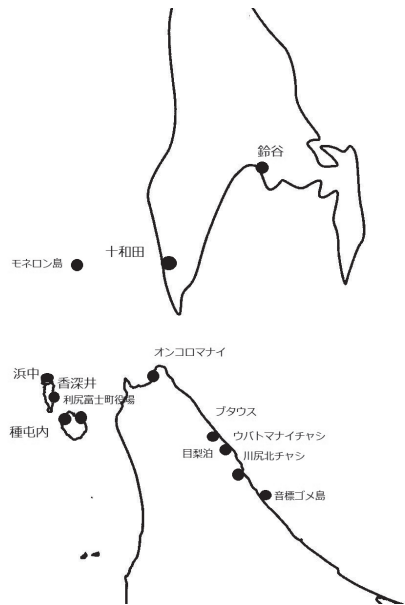


図 1. 遺跡分布図

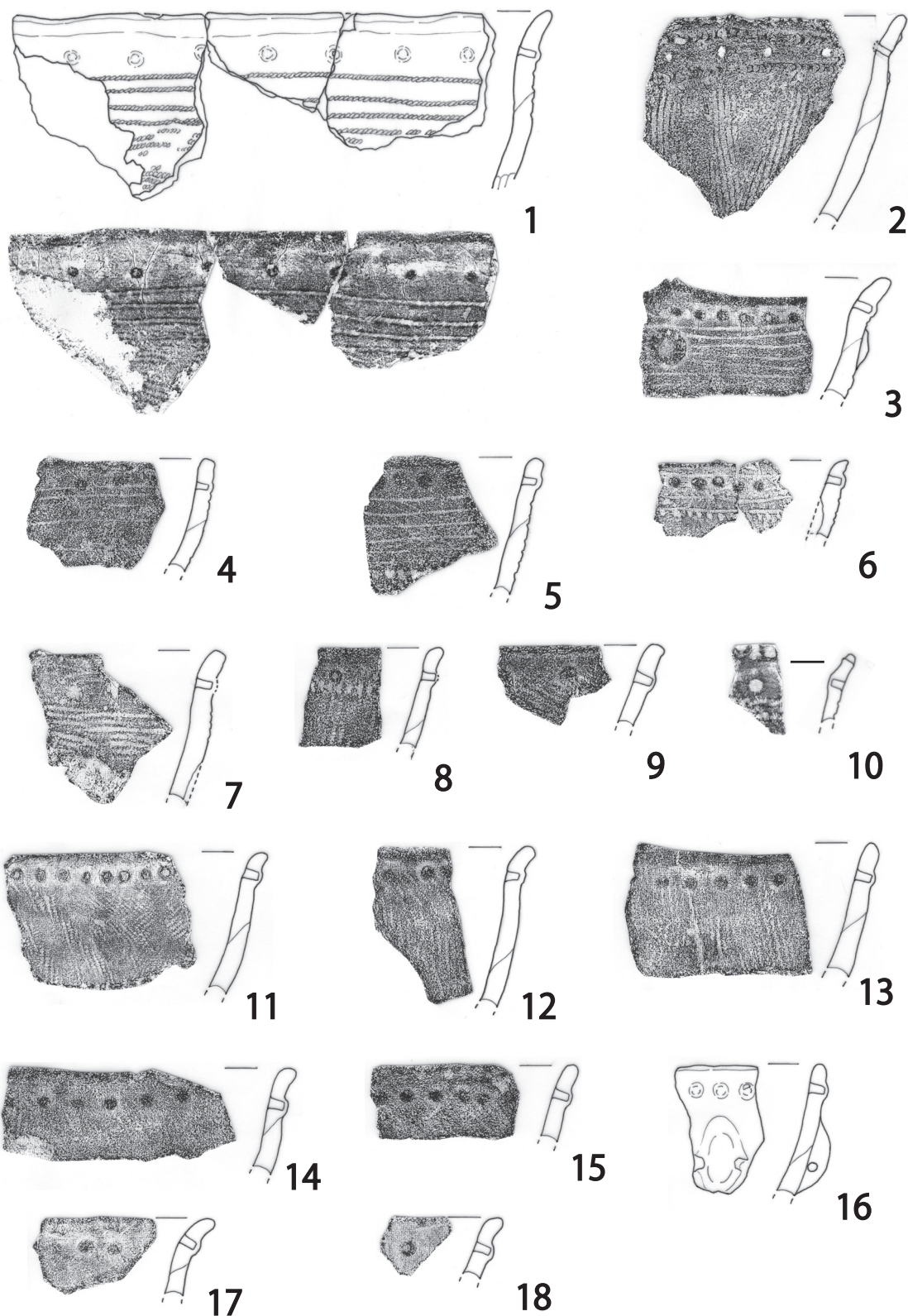


图 2. 枝幸高等学校郷土研究部採集土器 (S=3/1)



写真 1. 図 2-1 土器

を紹介する。

はじめに、紹介にあたり、文様の呼称や技法について、言及しておきたい。突瘤文とは、読んで字のごとく、土器を焼成する前に断面円形の棒状の施文具を使って、おもに土器の口縁部下の位置に、内面より外面方向へ“突き”、外側まで穴を貫通させずに、外面に“瘤状”の高まりをのこす技法である。この技法による土器は、続縄文文化期の宇津内式、オホーツク文化期の十和田式に代表される。一方で、外面より内面方向へ“突き”、内側まで穴を貫通させずに、内面に“瘤状”の高まりをのこす技法は、円形刺突文もしくは突瘤文と呼ばれる。この技法による土器は、続縄文文化期の北大式や前出の十和田式に代表される。なお、内面・外面の方向問わず貫通させる場合もまた、円形刺突文と呼ばれており、続縄文文化期のメクマ式、鈴谷（ススヤ）式（以下、鈴谷式）に代表される技法である。

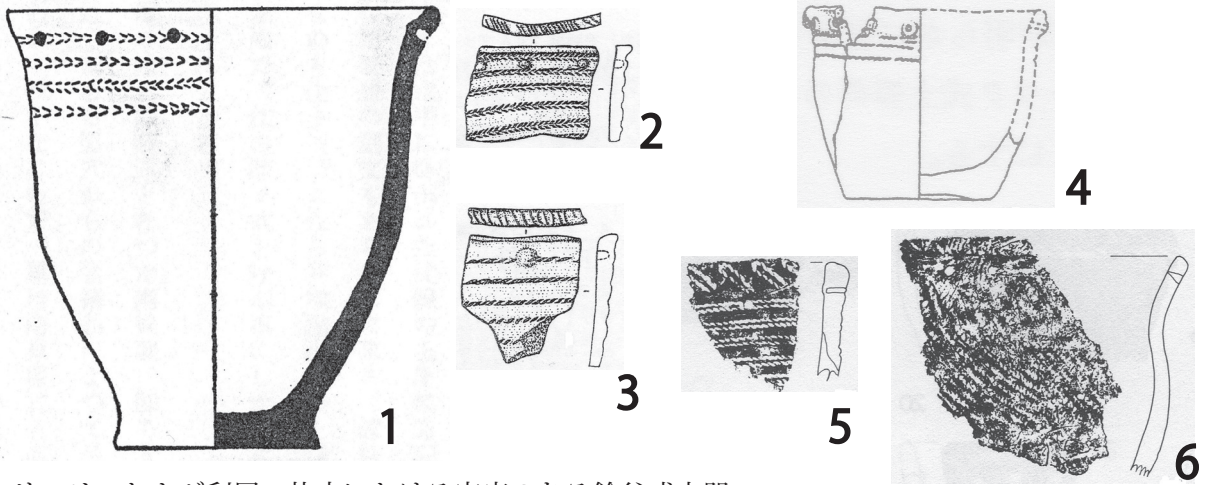
縄線文とは、縄の側面圧痕をいかした鈴谷式に特徴的な文様だが、伊東（1942）では、撚糸文（縄目文）が用いられた。今日では、縄線文という名称が多用されており、本稿でもそれに倣っている。なお、十和田式などにみられる形骸化した縄線文については、撚紐圧痕文として区別した。

18 点の観察記録を以下に述べる。いずれも口縁部破片で、2 と 10 以外は内面から外面方向への突瘤文が施される。

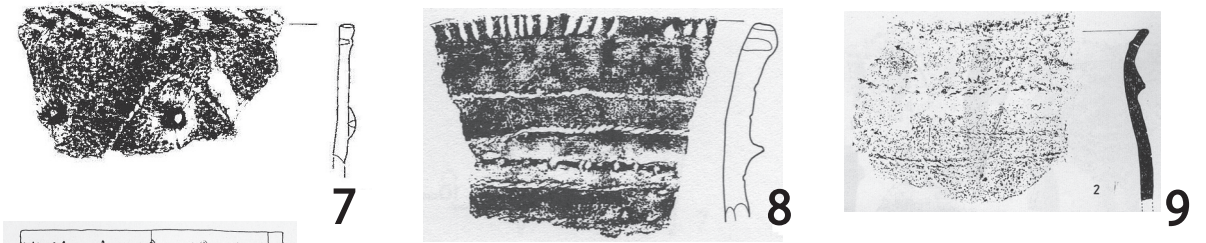
1 は、口縁がやや外反する甕形土器で、口径は推定で 28cm を測る。外面は、口唇部は丸みがあり、口縁直下に径 3 ～ 4mm の突瘤文がおおよそ 3cm 間隔で施文されている。頸部に、無節 R の縄線文が 4 条、以下に単節 LR が施文される。胎土は、砂や小石（最大径 4mm）を多量に含んでいる。内面全体に煤が付着している（写真 1）。

2 は、後北 C2・D 式土器の末期と考えられる。やや外反する口縁下に 2 条の三角形列点文が施文され、それらの間に外面から内面方向への円形刺突文が認められる。胴部は、帯縄文である。3 は、口縁部がやや外反する器形で間隔の狭い突瘤文と縄線文が施されている。口縁に山形の突起があり、ボタン状の貼付文が施文される。4・5 は、突瘤文下に複数の縄線文が施されている。6 は、口唇部が斜めに尖った形状で、沈線文と刺突文で構成される。7 は、口唇部が角張っており、やや外反する。胴部は RL 縄文である。8・9 は、突瘤文下に RL 縄文が施文されている。10 は、口唇部に棒状の施文具による刻みがあり、円形刺突文と撚紐圧痕文が認められる。

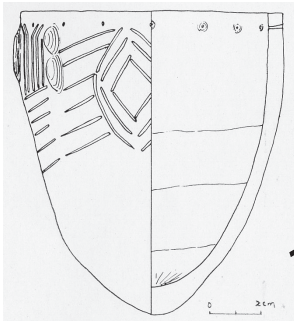
11 は、RL 斜縄文、12・13 は、撚糸文（回転圧痕）が突瘤文下に施文される。14・15 は、地文が縄文のようであるが、摩滅している。16 は、小型の鉢形土器で、つまみのような貼付文に横方向に孔が穿たれている。17・18 は、無文と思われる。1 以外の土器については、全体に磨滅して



サハリンおよび利尻・礼文における突瘤のある鈴谷式土器



利尻・礼文、枝幸町における突瘤文・撚紐圧痕文等が施文された十和田式土器



オンコロマナイ貝塚出土の尖底土器

種屯内遺跡出土の鉢形土器



図3. 鈴谷式・十和田式の融合土器例 (S=1/3)

おり、胎土に砂を多く含んでいる。

2. 鈴谷式・十和田式の融合土器

紹介した18点のうち、図2-1については、ほかとは器形や胎土、文様構成が異質である。

一見して、しっかりと圧痕された縄線文や器形などを見る限り、鈴谷式土器の特徴を兼ね備えているといえる。しかしながら、口縁部直下に突瘤文をもつこと、縄線文が口縁部直下から施文されず突瘤文とは一線を画すように頸部に施文された文様構成であることから、鈴谷式そのものとの判断はしがたい。すなわち、鈴谷式の次の段階である十和田式の要素も多分に持ち合わせており、双方の技法を採り入れた融合的な土器として、とらえておきたい。

では、図2-1に類似する資料としては、どのような例があるのだろうか。

樺太（サハリン）では、鈴谷式土器のタイプサイトである鈴谷貝塚において、突瘤文（外面から内面方向への円形刺突文）に縄線文が組み合わさった土器（図3-1）がよく知られている（伊東1942）。モネロン島ウーサワ遺跡の出土遺物としては、突瘤文と縄線文の土器（図3-2、3）が紹介されている（天野1998）。

利尻・礼文においては、香深井1遺跡で、内側からの刺突により貫通しているものの、突瘤がつくり出され、3条の縄線文が施された小型土器が出土している（図3-4）。浜中2遺跡においては、外側からの刺突により内面にわずかに突瘤がみとめられ、縄線文および縄文が施文されている（図3-5、6）。

ただし、上記例はいずれも、口縁部直下に突瘤文（円形刺突文）と縄線文が付随して施文される点で、図2-1よりも鈴谷式に近い部類と考えられる。

逆に、十和田式に近い部類は以下のような組み合わせがある。

稚内市オンコロマナイ遺跡H-3住居からは、鈴谷式に特徴的な尖底で円形刺突文（貫通孔）を有しているが、胴部に縄文が施文されず、幾何学的な刻線文と貼瘤文（瘤状の貼付文）が組み合わ

さった土器が出土している（図3-10）。

利尻・礼文では、浜中2遺跡より突瘤文に隆帯と撚紐圧痕文が組み合わさった土器（図3-8）、利尻富士町役場遺跡より突瘤文に貼瘤文と撚紐圧痕文が組み合わさった土器（図3-7）が出土している。

種屯内遺跡では、1979年の調査で出土した1号人骨に伴う鉢形土器（図3-11、写真）が利尻町立博物館に展示されている。この土器については、鈴谷式という見解（調査者の前田潮氏のご指示による）が示されており、器形が砲弾形で丸底に近く、周囲から鈴谷式土器の破片も伴っている。筆者は、円形刺突文（内面突瘤）を密に有することから、十和田式と考えている。

また、枝幸町の川尻北チャシでは、円形刺突文（内面突瘤）に隆帯と撚紐圧痕文が組み合わさった土器（図3-9）が出土している。

3. まとめと今後の課題

今回、資料紹介した図2-1は、これまで確認されている上記類似資料には、該当するものはない。枝幸町の近隣では、浜頓別町ブタウス遺跡にて鈴谷式土器が出土しており、十和田式土器がウバトマナイチャシや川尻北チャシ、音標ゴメ島に分布している。

道北部において営まれていた続縄文文化のなかで、縄線文や縄文をもつ鈴谷式土器は、宗谷海峡を挟んだ地域（サハリン南端～宗谷北端、利尻・礼文）に中心域を形成した。基本的にはその分布範囲を踏襲するかたちで、北方からのオホーツク文化や併行時期と考えられている北大式土器との関連で十和田式土器は成立したと考えられる。

今後、道北部だけではなくサハリン南部でも見出されている鈴谷式と十和田式の関係性などを具に検証し積み重ね、宗谷海峡域における続縄文文化期からオホーツク文化期にかけての画期について、確かな位置づけを行なうことが課題としてのこされていよう。

謝辞

今回の資料紹介にあたって機会をいただいた

高島孝宗氏をはじめ、資料分析にご助言をいただいた熊木俊朗氏、木山克彦氏、展示資料の便宜を図っていただいた佐藤雅彦氏に謝意を表します。

参考文献

- 天野哲也, 1998, 「オホーツク文化の形成と鈴谷式の関係—礼文島香深井遺跡群を中心に—」『野村崇先生還暦記念論集 北方の考古学』. 野村崇先生還暦記念論集刊行会. 北海道.
- 天野哲也・小野裕子, 2002, 「オホーツク文化の形成過程 - 「十和田式」をさかのぼる」『サハリンにおけるオホーツク文化の形成と変容・消滅』. 北海道大学総合博物館, 札幌.
- 泉靖一・曾野寿彦編, 1967, 『オンコロマナイ』. 東京大学出版会, 東京.
- 伊東信雄, 1942, 「樺太先史時代土器編年試論」. 『喜田貞吉博士追悼記念国史論集』. 大東書館, 東京.
- 右代啓視, 1991, 「オホーツク文化の年代学的諸問題」『北海道開拓記念館研究年報』(19): 23-52.
- 枝幸町教育委員会, 1972, 『枝幸町川尻チャシ調査概報』. 枝幸町, 北海道.
- 大場利夫・大井晴男, 1976, 『香深井遺跡』(上). 東京大学出版会, 東京.
- 大場利夫・大井晴男, 1981, 『香深井遺跡』(下). 東京大学出版会, 東京.
- 川名広文・高島孝宗, 2010, 「音標ゴメ島遺跡分布調査報告」. 『枝幸研究』(2): 45-62.
- 川名広文・高島孝宗, 2012, 「音標ゴメ島遺跡試掘調査報告」. 『枝幸研究』(3): 25-42.
- 種石悠, 2023, 『オホーツク文化の考古学 辺境から眺める古代日本』. 銀河書籍, 大阪.
- 種屯内遺跡調査団, 1998, 「種屯内遺跡第2次発掘調査報告(1996年)」. 『利尻研究』(17): 67-96.
- 種屯内遺跡調査団, 1999, 「種屯内遺跡第3次発掘調査報告(1997年)」. 『利尻研究』(18): 107-141.
- 種屯内遺跡調査団, 2000, 「種屯内遺跡第4次発掘調査報告(1998年)」. 『利尻研究』(19): 101-135.
- 種屯内遺跡調査団, 2001, 「種屯内遺跡第5次発掘調査報告(1999年)」. 『利尻研究』(20): 113-151.
- 種屯内遺跡調査団, 2002, 「種屯内遺跡発掘調査報告 総括編1 事実関係」. 『利尻研究』(21): 131-150.
- 種屯内遺跡調査団, 2004, 「利尻島種屯内遺跡の考古学的調査」『歴史人類』(32), 130-72.
- 浜頓別町教育委員会, 2018, 『ブタウス遺跡(Ⅲ)』. 浜頓別町, 北海道.
- 北海道立埋蔵文化財センター, 2002, 『奥尻町青苗砂丘遺跡』. 北海道立埋蔵文化財センター, 北海道.
- 北海道立埋蔵文化財センター, 2003, 『奥尻町青苗砂丘遺跡2』. 北海道立埋蔵文化財センター, 北海道.
- 前田潮, 2002, 『オホーツクの考古学』. 同成社, 東京.
- 前田潮・西谷榮治, 1997, 「利尻町種屯内遺跡発掘調査報告」. 『利尻研究』(16): 29-59.
- 前田潮・山浦清, 1992, 『北海道礼文町 浜中2遺跡の発掘調査』. 礼文町教育委員会, 北海道.
- 前田潮・山浦清, 2002, 「礼文島浜中2遺跡第2～4次発掘調査報告」『筑波大学先史学・考古学研究』(13): 35-87.
- 山谷文人, 2013, 「利尻富士町役場遺跡の調査からみたオホーツク文化成立期の様相」『北海道立北方民族博物館友の会・季刊誌アークティック・サークル』(87).
- 利尻町教育委員会, 1978, 『亦稚貝塚』. 利尻町, 北海道.
- 利尻富士町教育委員会, 1995, 『利尻富士町役場遺跡発掘調査報告書』. 利尻富士町, 北海道.
- 利尻富士町教育委員会, 2011, 『利尻富士町役場遺跡発掘調査報告書Ⅱ』. 利尻富士町, 北海道.
- 礼文町教育委員会, 1997, 『香深井5遺跡発掘調査報告書』. 礼文町, 北海道.
- 礼文町教育委員会, 1999, 『香深井5遺跡発掘調査報告書(2)』. 礼文町, 北海道.